

実習経験が学生の排泄介護意識に与える影響

後藤 満枝 内野 秀哲

Mitsue Goto, Hidetaka Uchino: The Effect That Practical Care Training Has on Students' Awareness of Excretion Care. Bulletin of Sendai University, 46 (2) : 47-59, March, 2015.

Abstract: This research was conducted in order to reveal what effect practical care training has on students' awareness of excretion care. The subjects of this study are university students who entered the university in the same year and studied at a care worker training course, and the comparison was made between their experience and awareness of excretion care when they were freshmen and those when they were senior.

As a result, when they were freshmen, many of them showed reluctance to get involved in excretion care as well as a negative image toward it when they were freshmen due to lack of experience. On the other hand, when they were senior, the number of students who showed reluctance greatly decreased due to their adaptation to it through the practical care training and the recognition of the need for excretion from the perspective of physiological function. There was a significant difference in the reluctance toward excretion care between when they were freshmen and when they were senior. These facts show that the learning experience in excretion care through practical care training and learning in classes at university will weaken the students' reluctance and negative image toward excretion care.

Key words: reluctance, negative image, physiological function, practical care training

キーワード: 抵抗感, 否定的イメージ, 生理機能, 介護実習

I. はじめに

排泄は人間が生きていくために必要な生理的機能の一部であり、欠かすことのできないものである。しかしながら、排泄は人間が最期まで他人の世話になりたくないプライベートな行為であるがゆえに、排泄介護は、被介護者、介護者ともに最も抵抗を感じる介護場面である。それは介護の知識や経験のない人にとってはなおさらであろうが、これから介護福祉士という専門職を志す養成校の学生であっても同様である。

排泄の介護は、介護福祉士の資格を取得する

ための学習内容の中に含まれているが、授業で初めて排泄介護に関する知識や技術を専門的に学ぶことになる学生がほとんどである。こうした排泄介護の知識や経験の少ない学生にとって排泄介護行為自体をイメージすることは難しく、少ない知識・経験から、排泄物特有の「汚い」「臭い」などといった特徴を連想し、そこから排泄介護に携わることへ抵抗感などの否定的なイメージを生むことにつながっていると考えられる。看護学生を対象に調査した排泄の援助に関する市丸ら³⁾による研究において、実際に、この「汚い」イメージについては「排泄のイメージ」として多かった回答の一つとして

報告されている。しかし、「汚い」イメージの回答は、授業前よりも授業後、1年次よりも2年次のほうが少なくなるという結果も示されている。こうした排泄援助の学習経験と意識の関連を調査した研究は少なく、介護の分野では例が見られない。また、より長期にわたり、実際の援助の対象者と直接関わる学外実習経験の有無に着目して排泄の援助に関する意識との関連を調査した研究は見当たらない。排泄介護に関する知識を習得し技術的な経験を重ねることによって、排泄介護に対するとらえ方も変化し、排泄介護に携わることへの抵抗感の減少や排泄介護の否定的イメージの抑制につながると考えられる。それは排泄介護のイメージのみならず、「汚い」「きつい」などのイメージが定着した「介護」そのもののイメージの払拭にもつながるものと期待できる。

そこで本研究では、介護福祉士養成課程の大学生を対象に、同じ入学年度の学生の1年生と4年生の時の調査結果から、排泄介護に対する意識について比較検討を試みる。1年次から4年次までの期間の中で、排泄介護の知識を習得し介護実習等での排泄介護の経験を重ねることが、学生の排泄介護に対する抵抗感やイメージなどにどのように影響するか、排泄介護に対する意識の変化について明らかにすることを目的とする。さらに、排泄介護に関する介護学生の基礎的情報を把握することもあわせて、これらの結果が今後の介護福祉教育を行う上での基礎資料になればと考える。

II. 研究方法

1. 調査対象者及び調査方法

S大学の介護福祉士養成課程の平成22年度入学生を対象に、1年生の時（以下、1年時とする）と3年後の4年生の時（以下、4年時とする）に、それぞれ同様の質問紙調査を実施した。調査内容は、排泄介護の経験や意識に関するものである。具体的な設問項目は、排泄介護に携わった経験と排泄介護を受けた経験の有無や、それぞれの経験の相手、排泄介護方法、経験したときの気持ち、排泄介護で介護者に配慮

してほしいこと、排泄介護に携わることに対する抵抗感の有無やその理由、排泄介護に対するイメージ等についてである。なお、入学時と現在とでの介護のイメージの違いについての設問のみ1年時の調査項目には入れていなかったため、この項目に関しては4年時の調査に加え、参考として平成25年度入学の1年生にも調査を実施した。

調査は無記名自記式とし、仙台大学倫理審査会の承認を受けた上で、研究の趣旨を説明した後、調査対象者の承諾を得て実施した。調査時期については、1年時の調査は、排泄の授業や介護実習を経験する前の平成22年7月に、4年時の調査は、排泄の授業や介護実習を全て終了している平成25年7月に、それぞれ実施した。調査対象者数は、1年時の調査は58名（男性32名、女性26名）、4年時の調査は45名（男性23名、女性22名）であり、双方とも全員から回答が得られ（回答率100%）、対象者全員の回答について分析を行った。なお、平成25年度入学の1年生への調査は、平成25年7月に実施し、調査対象者15名（男性13名、女性2名）全員から回答が得られた。

2. 統計処理

調査で得られた回答は、1年時と4年時でそれぞれ実数、率（%）で表した。また、設問項目によっては、 χ^2 検定を用いて、1年時と4年時の回答を比較検討した。有意水準は $p<0.05$ 、 $p<0.01$ をそれぞれ*、**として図中に記号で示した。

III. 結果

1. 回答者について

回答者の基本属性については表1に示す。1年時の調査では男性32名（55.2%）、女性26名（44.8%）、計58名、4年時の調査では男性23名（51.1%）、女性22名（48.9%）、計45名から回答が得られた。1年時の平均年齢は18.4歳±0.67、4年時は21.4歳±0.50であった。

実習経験が学生の排泄介護意識に与える影響

表 1 回答者の基本属性

	調査時期		
	1年時 (平成22年度)	4年時 (平成25年度)	1年生 (平成25年度) ※入学時と現在とでの介護の イメージの違いについてのみ調査
男性	32名 (55.2%)	23名 (55.1%)	13名 (86.7%)
女性	26名 (44.8%)	22名 (48.9%)	2名 (13.3%)
合計	58名 (100.0%)	45名 (100.0%)	15名 (100.0%)
平均年齢	18.4歳 ± 0.67	21.4歳 ± 0.50	18.4歳 ± 0.51

2. 排泄介護に携わった経験

排泄介護に携わった経験については表2に示す。これまでに排泄介護に携わった経験のある学生は、1年時で6名(10.3%)、経験のない学生は52名(89.7%)、4年時では45名全員(100.0%)が経験を持っていた。具体的に携わった相手は、1年時では「身内」5名(8.6%)、「介護実習先の利用者」1名(1.7%)であり、4年時では「身内」8名(17.8%)、「介護実習先の利用者」45名全員(100.0%)、「その他」1名(2.2%)であった。

また、具体的な排泄介護の方法は、1年時では「トイレ誘導・介助」4名(6.9%)、「ポータ

ブルトイレへの誘導・介助」2名(3.4%)、「尿器を使用した介助」と「便器を使用した介助」が共に1名ずつ(各1.7%)、「オムツ交換」5名(8.6%)であった(合計のべ13件)。一方、4年時では「トイレ誘導・介助」45名(100.0%)、「ポータブルトイレへの誘導・介助」29名(64.4%)、「尿器を使用した介助」14名(31.1%)、「便器を使用した介助」33名(73.3%)、「オムツ交換」43名(95.6%)であった(合計のべ164件)。

排泄介護に初めて携わったときの気持ちについては図1に示す。1年時では、排泄介護に携わったことがあると回答した6名のうち、「排

表 2 排泄介護に携わった経験

		1年時	4年時
排泄介護に携わった 経験の有無	ある	6名 (10.3%)	45名 (100.0%)
	ない	52名 (89.7%)	0名 (0.0%)
誰の排泄介護に 携わったか	身内	5名 (8.6%)	8名 (17.8%)
	介護実習先の利用者	1名 (1.7%)	45名 (100.0%)
	その他	0名 (0.0%)	1名 (2.2%)
どんな排泄介護に 携わったか	トイレへの誘導・介助	4名 (6.9%)	45名 (100.0%)
	ポータブルトイレへの誘導・介助	2名 (3.4%)	29名 (64.4%)
	尿器を使用した介助	1名 (1.7%)	14名 (31.1%)
	便器を使用した介助	1名 (1.7%)	33名 (73.3%)
	オムツ交換	5名 (8.6%)	43名 (95.6%)

排泄物の特性に対する嫌悪感」「排泄介護の技術に対する難しさ」「利用者の思いを察した感情, 遠慮」を感じた学生がそれぞれ3名(50.0%),「排泄介護に対する精神的苦痛」を感じた学生が1名(16.7%)などという結果であった。4年時では, 排泄介護に携わったことがあると回答した全45名のうち,「排泄物の特性に対する嫌悪感」を感じたのが9名(20.0%),「排泄介護に対する精神的苦痛」は11名(24.4%),「排泄介護の技術に対する難しさ」は12名(26.7%),「利用者の思いを察した感情, 遠慮」は9名(20.0%)などという結果であった。

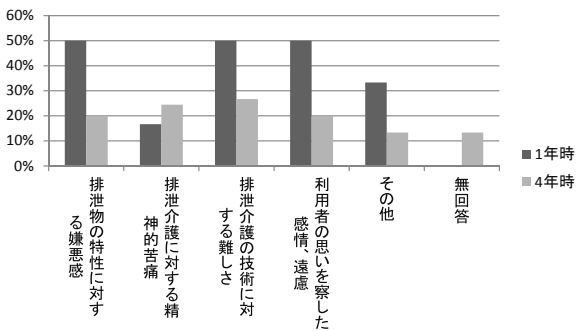


図1 排泄介護に初めて携わったときの気持ち

3. 排泄介護を受けた経験

排泄介護を受けた経験については表3に示す。1年時では, これまでに病気やけが等で自身が排泄介護を受けた経験のある学生は4名(6.9%), 経験がないのは53名(91.4%), 無回答は1名(1.7%)であった。一方, 4年時では経験があるのは6名(13.3%), 経験がないのは39名(86.7%)であった。具体的に誰からの排泄介護を受けたかについては, 1年時では「看護師」「身内」が共に2名(各3.4%), 「その他」が1名(1.7%)であった。4年時では「看護師」が6名(13.3%), 「身内」が1名(2.2%)であった。

また, 具体的にどんな排泄介護を受けたかについては, 1年時では, 「トイレへの誘導・介助」と「ポータブルトイレへの誘導・介助」が共に1名ずつ(各1.7%), 「尿器を使用した介助」が5名(8.6%), 「便器を使用した介助」が1名(1.7%), 「オムツ交換」が2名(3.4%), 「導尿(カテーテル)」の回答はなかった。一方, 4年時では, 「トイレへの誘導・介助」が2名(4.4%), 「オムツ交換」が1名(2.2%), 「導尿(カテーテル)」が3名(6.7%)で, その他の排泄方法での経験はなかった。

表3 排泄介護を受けた経験

		1年時	4年時
排泄介護を受けた経験の有無	ある	4名(6.9%)	6名(13.3%)
	ない	53名(91.4%)	39名(86.7%)
	無回答	1名(1.7%)	0名(0.0%)
誰からの排泄介護を受けたか	看護師	2名(3.4%)	6名(13.3%)
	身内	2名(3.4%)	1名(2.2%)
	その他	1名(1.7%)	0名(0.0%)
どんな排泄介護を受けたか	トイレへの誘導・介助	1名(1.7%)	2名(4.4%)
	ポータブルトイレへの誘導・介助	1名(1.7%)	0名(0.0%)
	尿器を使用した介助	5名(8.6%)	0名(0.0%)
	便器を使用した介助	1名(1.7%)	0名(0.0%)
	オムツ交換	2名(3.4%)	1名(2.2%)
導尿(カテーテル)	0名(0.0%)	3名(6.7%)	

排泄介護を受けたときの気持ちについては図2に示す。「羞恥心」を感じていたのは、1年時では、排泄介護を受けたことがあると回答した4名全員(100.0%)で、4年時でも6名のうち3名(50.0%)が同様に「羞恥心」を感じていた。その他、「介護者に対してすまない」「不便」「自分で行いたい」などという気持ちの回答があった。

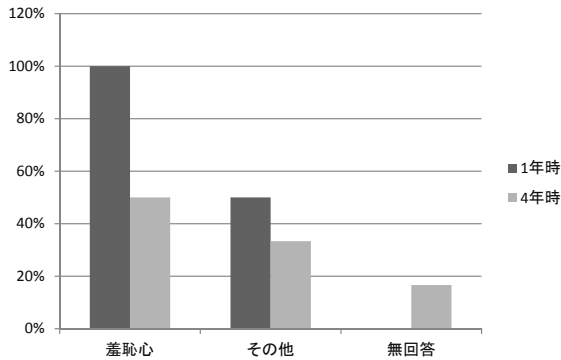


図2 排泄介護を受けたときの気持ち

4. 排泄介護の際の配慮

排泄介護を受ける場合に、プライバシーや羞恥心への配慮の観点から介護者に配慮してほしいことについては、図3に示す。回答件数は1年時74件(一人当たり平均1.3件)、4年時61件(一人当たり平均1.4件)であった。「肌の露出等に対する物理的対応」についての回答が1年時には29名(50.0%)、4年時には30名(66.7%)と最も多く、次いで「介護者の属

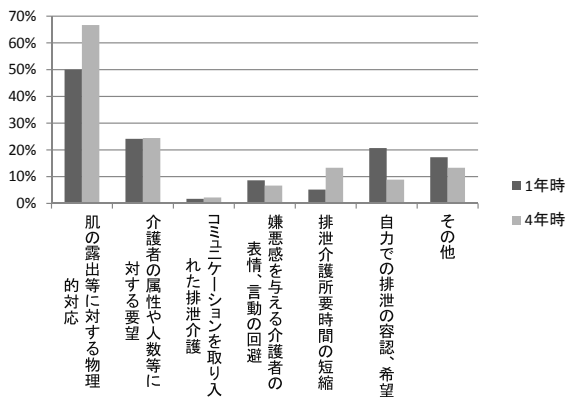


図3 排泄介護の際に介護者に配慮してほしいこと

性や人数等に対する要望」が1年時には14名(24.1%)、4年時には11名(24.4%)と多かった。なお、この設問に関してはどの項目も1年時と4年時の間に有意差は認められなかった。

5. 排泄介護に携わることに対する抵抗感

排泄介護に携わることに対する抵抗感については図4-1、図4-2に示す。1年時には「とてもある」12名(20.7%)、「少しある」36名(62.1%)を合わせた48名(82.8%)の学生が抵抗感を持っていたのに対し、4年時は「とてもある」2名(4.4%)、「少しある」21名(46.7%)を合わせた23名(51.1%)が抵抗感を持っており、4年時に31.7ポイント減少、抵抗感を持つ学生が全体の約半数にまで減少した。1年時には「ほとんどない」4名(6.9%)と「ない」5名(8.6%)を合わせると9名(15.5%)、4年時には「ほとんどない」17名(37.8%)、「ない」5名(11.1%)を合わせると22名(48.9%)に増加した。「とてもある」と「少しある」の回答を合わせて「抵抗あり群」と括り、「ほとんどない」と「ない」の回答を合わせて「抵抗なし群」と括って有意差を調べたところ、この項目に関しては図5のように有意差が認められた($p < 0.01$)。

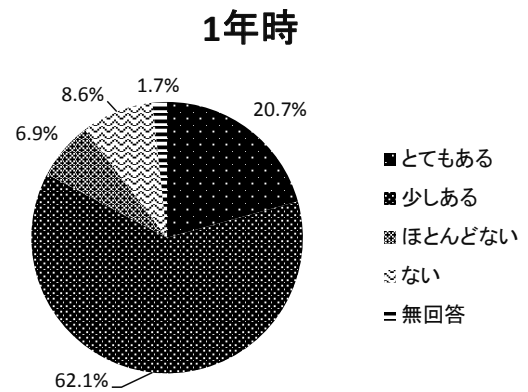


図4-1 排泄介護に携わることに対する抵抗感(1年時)

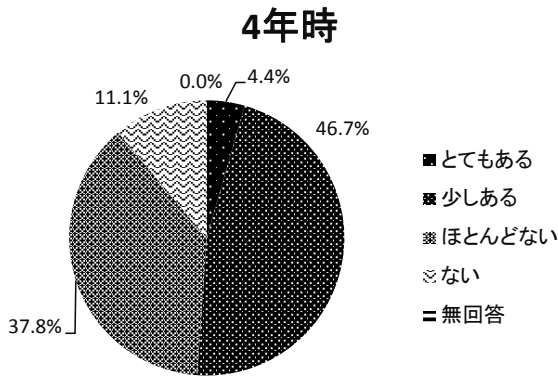


図 4-2 排泄介護に携わることに対する抵抗感 (4年時)

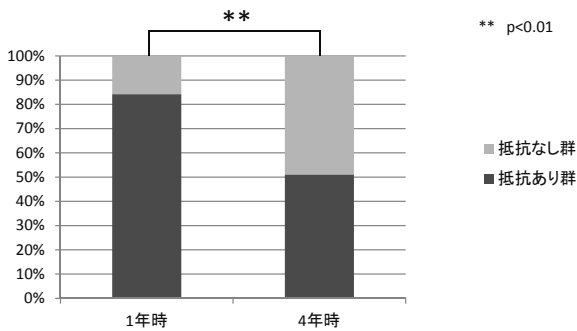


図 5 排泄介護に携わることに対する「抵抗あり群」と「抵抗なし群」の割合

抵抗感の有無の理由については図 6 に示す。「排泄物の特性に対する抵抗感」があるとの回答は 1 年時 13 名 (22.4%), 4 年時 12 名 (26.7%) と、共に多い傾向にあったが、有意差は認められなかった。1 年時から 4 年時にかけて大幅な減少がみられた項目は、「他人の排泄に関わることへの抵抗感」で、1 年時 15 名 (25.9%) から 4 年時 4 名 (8.9%) と 17.0 ポイント減少 ($p<0.05$), 「排泄介護に対する漠然とした否定的イメージ」も 1 年時 6 名 (10.3%) から 4 年時 0 名 (0.0%) と 10.3 ポイント減少 ($p<0.05$), 「排泄介護の経験の乏しさ」も 17 名 (29.3%) から 0 名 (0.0%) と 29.3 ポイント減少 ($p<0.01$) であり、表記のとおりそれぞれ有意差が認められた。一方、1 年時から 4 年時にかけて大幅に増加した項目は「排泄介護の経験による慣れ」で、1 年時 1 名 (1.7%) から 4 年時 7 名 (15.6%) と 13.9 ポイ

ント増加 ($p<0.05$), 「生理機能的観点での必要性から」も 1 年時 3 名 (5.2%) から 4 年時 10 名 (22.2%) と 17.0 ポイント増加 ($p<0.05$) であり、これらも表記のとおりそれぞれ有意差が認められた。

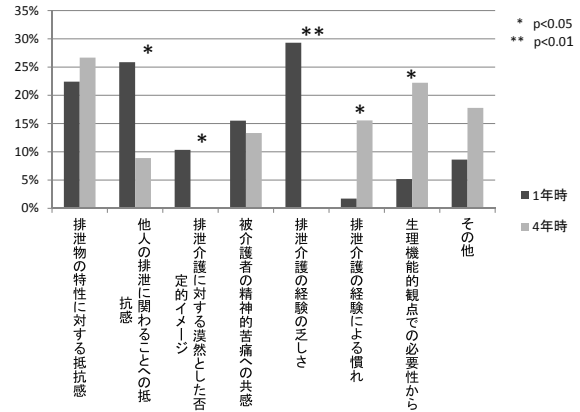


図 6 排泄介護に携わることへの抵抗感の有無の理由

6. 排泄介護に対するイメージ

排泄介護に対するイメージについては図 7 に示す。「排泄物の特性の印象」は 1 年時 13 名 (22.4%), 4 年時 9 名 (20.0%), 「排泄介護技術の難しさ・大変さ」は 1 年時 11 名 (19.0%), 4 年時 9 名 (20.0%) であり、これらの回答は 1 年時・4 年時とも 20% 前後の学生が挙げており、共に大きな変化はみられなかった。1 年時から 4 年時にかけて大幅な減少がみられた項目は「嫌悪感・抵抗感のある介護領域」で、1 年時 13 名

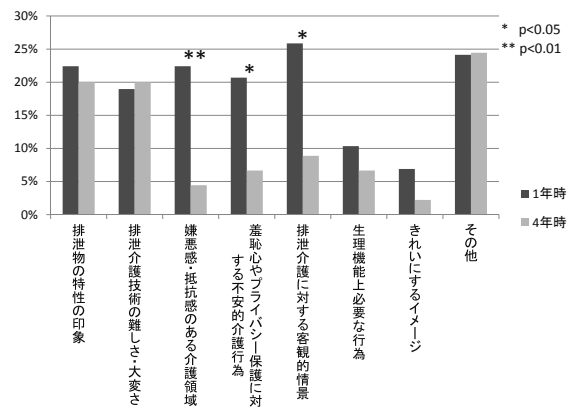


図 7 排泄介護に対するイメージ

(22.4%) から2名 (4.4%) と18.0ポイント減少 ($p<0.01$), 「羞恥心やプライバシー保護に対する不安的介護行為」も1年時12名 (20.7%) から4年時3名 (6.7%) と14.0ポイント減少 ($p<0.05$), 「オムツ交換」や「排泄物の処理」などと「排泄介護に対する客観的情景」をイメージした内容の回答も, 1年時15名 (25.9%) から4年時4名 (8.9%) と17.0ポイント減少 ($p<0.05$) であり, 表記のとおりそれぞれ有意差が認められた。

7. 介護に対するイメージ

大学入学前または入学当初に抱いていた「介護」のイメージと現在の「介護」のイメージの違いについては, 1年時の調査項目に入れておらず4年時との比較ができないため, 平成25年度には4年生に加え, 同じ年度の1年生にも参考までに調査を行った。その結果を図8-1, 図8-2に示す。平成25年度の1年生では, 介護のイメージの違いについて「とてもある」と回答したのは1名 (6.7%), 「少しある」は2名 (13.3%), 「ほとんどない」は9名 (60.0%), 「ない」は3名 (20.0%) であった。一方, 平成25年度の4年生では, 「とてもある」が14名 (31.1%), 「少しある」が11名 (24.4%), 「ほとんどない」が16名 (35.6%), 「ない」が3名 (6.7%) であり, 半数以上の4年生が当初抱いていた介護のイメージとの違いがあると回答した。

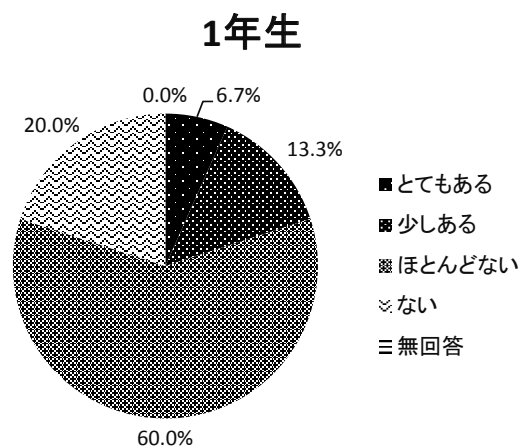


図8-1 入学時と現在とでの介護のイメージの違い (平成25年度：1年生)

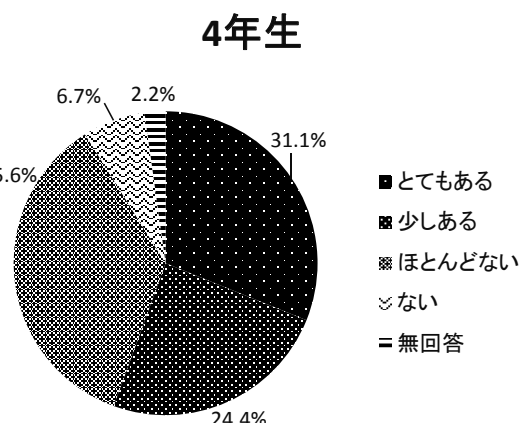


図8-2 入学時と現在とでの介護のイメージの違い (平成25年度：4年生)

その具体的内容について自由に記述してもらったところ, 平成25年度の1年生については15名中3名 (20.0%) から, また, 平成25年度の4年生については45名中24名 (53.3%) から回答得られたため, 表4に示す。1年生の回答には, 「すべてを手伝うのではなく, できないところだけを介護するというのを初めて知った」や「自立をうながす所」という回答のほか, 「介護が本当に大変な仕事だということを授業を通じて徐々に感じた」という回答があった。4年生の回答には, 「介護は暗いイメージだったが, 実習をして施設は明るく, 笑顔があふれていた」「もっと辛いイメージがあったが, 利用者と関わる中で, 楽しさややりがいなどがあり, 辛いだけではないと感じた」などという回答があった。またその一方で, 「実習を行った際に思っていた以上に過酷であると思った」「教科書と現場は違う」「現場のスタッフに, 介助はていねいさよりも早さだと言われて, 自分の考えていたことと食い違い, やっていけない, その時思った」などという回答もあった。

表4 入学時と現在とでの介護のイメージの違い(具体的内容)

※ほぼ原文のまま掲載

平成 25 年度の 1 年生の回答
すべてを手伝うのではなく、できないところだけを介護するということを初めて知った。
介護が本当に大変な仕事だということを授業を通じて徐々に感じました。
自立をうながす所。
平成 25 年度の 4 年生の回答
実習を通す中で楽しみを見つけられた。
介護は暗いイメージだったが、実習を通して施設は明るく、笑顔があふれていた。
仕事内容がかなり濃い。
もっと辛いイメージがあったが、利用者に関わる中で、楽しさややりがいなどがあり、辛いだけではないと感じた。
介護には信頼関係が大切だと知った。
オムツは汚れてなかったら、かえない。キレイにこまかに洗身をしない。けっこう不潔。
介護はしてあげるものだと思っていたが、もし就職したときに職員の立場になった場合、介助してあげるのではなく、介助させていただくということを学んだから。
大学に入って実習をやっているうちに、最初はきたない、くさいなどあったが、慣れてしまったのかあまり感じなくなった。
教科書と現場は違うから。
当初は、きついイメージがほとんどであったが、利用者を実習で関わっていくうちに楽しさがあるということを感じた。
最初は大変だという思いが多かったが、今ではすてきな仕事だと思っている。
最初は本当に介護をしたくなかった。「3K」からくるイメージ。周りから非難される感じがイヤだった。でも、今では介護をはじることなく介護は良いものだと言っている。
利用者に関わることで楽しいこともある。
介護実習。
仕事だと大変だなと思った。
実際に自分が介助してみても変わった。
介護する・される側の両方を経験したから。
実習を通して、思っていたより多くの業務があった。
流れ作業が多い。
実習先ではどの施設も、プライバシーに配慮していたし、においなども気にならなかった。
現場の介助スタッフに、介助はていねいさよりも早さだと言われて、自分の考えていたことと食い違い、やっていけないと、その時思った。介護福祉養成課程の人たちをもっと介助を指導して、現場に実習に行っても恥じないようにしてほしい。
実習を行った際に思っていた以上にかこくであると思った。
当初考えていた排泄介助と実際の排泄介助には多くの違いがあったから。
技術よりもコミュニケーションが大切であるとわかった。

IV. 考察

1. 排泄介護に携わった経験について

1年時では排泄介護に携わった経験のある学生は1割程度であったが、4年時では介護実習によって全員が排泄介護を経験していた。S大学の介護福祉士養成課程における学外介護実習は2年次と3年次に集中して行われている。2年次には、介護実習Ⅰが認知症対応型共同生活介護や通所介護施設、通所リハビリ施設で8月から9月の時期に12日間の日程で行われている。3年次には、介護実習Ⅱと介護実習Ⅲがそれぞれ5月と9月に23日間ずつ、特別養護老人ホームや介護老人保健施設、障害者支援施設で行われている。学生はその期間中、様々な介護業務の中の1つとして排泄介護の経験をしている。排泄介助は、食事介助や入浴介助と並んで一般的に三大介助と呼ばれる主要な介助であるが、介助方法や場面・状況も様々であるため、幅広い経験が培われたものと推察できる。なお、4年時までの間に身内の排泄介護に携わった学生の割合は8.6%から17.8%と2倍以上に増加しており、排泄介護に携わる機会が確実に増加していたことも調査結果からうかがえた。

排泄介護の方法としては、4年時の中でも「トイレ誘導・介助」や「オムツ交換」に携わることを経験した学生がほとんどであった。また、1年時では、尿器や便器を使用した介助の経験はほとんどなかったが、4年時ではその割合が増加しており、特に「便器を使用した介助」は7割以上の学生が経験している。尿器には男性用と女性用が存在するが、一般的に男性のみに使用されることが多く、女性の使用例はあまり見られない。このことは、土井²⁾による看護領域での調査結果でも示されている。便器は男女兼用というのが一般的であり、特に女性は排尿の場合も排便の場合も便器を使用することが多い。介護施設の利用状況については、平均寿命との関係や介護保険受給者数との関係^{5) 6)}から傾向として男性よりも女性のほうが多く、必然的に便器を使用した介助に携わる機会が多いため、それが調査結果に影響を与えているものと考えられる。今回の調査結果によれば、尿器

を使用した介助は3割程度の学生が4年時までには経験しているものの、約7割の学生は介護実習でも未経験である。男性利用者の中でも夜間帯に限定した使用や自分で行える方の使用例が多いことから、介護実習では尿器を使用した排泄介護の場面に携わる機会が少なかった可能性がある。よって、学内での演習で体験することはあっても、介護職に就いた際に初めて尿器を使用した排泄介助に携わる人も少なくないと考えられる。

また、排泄介護に初めて携わったときに、1年時では、経験者のうちの半数が「排泄物の特性に対する嫌悪感」「排泄介護の技術に対する難しさ」「利用者の思いを察した感情、遠慮」を感じており、携わったときに感じた感情は必ずしも1つの感情だけではない。1年時と4年時では排泄介護の経験者数に開きがあり、単純比較することの難しさがあった。

2. 排泄介護を受けた経験について

これまでに病気やけが等で自身が排泄介護を受けたことのある学生は、1年時・4年時ともに少数であったが、1年時では4名(6.9%)、4年時では6名(13.3%)と、3年間で6.4ポイント増加している。これは、単純計算で1年に2.1%ずつ増加するということになる。今回は他の介護福祉士養成学校や同世代の人との調査比較はしていないが、体育系大学であるS大学では、運動中のけがなどによって他者から排泄介護を受ける機会も幾分多い可能性があるため、このことを考慮した見方が必要であろう。また、身内だけでなく看護師から介護を受けたことがある学生がいることや、4年時に導尿(カテーテル)の経験者がいることから、これらは通院または入院を要するようなけがや病気等により排泄介護を受けたものと考えられる。なお、排泄介護を受けたときの気持ちの大半は「羞恥心」であったが、介護者に対する申し訳なさや遠慮など、自力で排泄できないもどかしさのような感情の回答もあり、「羞恥心」と関連のある回答である。

3. 排泄介護の際の配慮について

排泄介護に携わったことも排泄介護を受けたこともない学生にとっては、排泄介護とはどのように行えばよいか想像し難い。そのため、1年時でもある程度回答しやすいよう、被介護者の立場に立った想定での設問にした。これは、排泄介護に関する講義や実習等の学習経験の有無によって、導き出せる回答件数や具体的な配慮の方法に違いが見られるかを把握するためでもあった。調査の結果、1人当たりの平均回答件数は、1年時と4年時とでほとんど差が見られなかった。回答内容については、「肌の露出等に対する物理的な対応」の回答が1年時・4年時共に半数以上と最も多かった。これは、具体的には「バスタオル等で隠してほしい」「カーテンやドアを閉めて周りから見えないように配慮してほしい」「できるだけ介護者にも肌を見られたくない」などというものである。他人の介助を受けて排泄することを想像した場合に最も強く抱く感情は、「他人に肌を見られてしまう恥ずかしさ」であると思われる。物理的に、そして容易に行える対応のためこの回答が最も多かったのだと考えられる。次に多かった「介護者の属性や人数等に対する要望」とは、具体的には介護者と被介護者の関係を示す「同性介護」や「1対1での関わり」を希望するものである。介護施設等の現場においては人材不足等の関係から必ずしも「同性介護」で行われていない現状もあるが、特にプライバシーに関わる「排泄介助」や「入浴介助」については「同性介護」が好ましい。同性であっても他人の排泄介護への関わりに抵抗感を持つわけであるため、異性が対象であればなおさら抵抗感は強いものと考えられる。特に学習初期段階において異性の介護に携わることは排泄介護のみならず介護そのものに対する抵抗感を与えるきっかけになる可能性があり、ひいては介護人材を減らすことにもつながりかねない。原則は同性介護としながらも原則通りにはいかない現状について、どう学生の介護福祉教育の中で理解を得るかは今後の課題である。

この排泄介護の際の配慮に関する設問については1年時と4年時の間に有意差がなかったが、

被介護者の立場に立って物事を見たり考えたりすることは介護に携わる上での基本姿勢である。排泄介護の経験の有無に関わらず、常に被介護者の立場に立った見方・考え方ができれば、いずれ学習経験によって知識・技術を身につけたときに、より理解力も深まると考えられる。

4. 排泄介護に携わることに対する抵抗感について

排泄介護に携わることに抵抗感を持つ学生は、1年時で8割以上だったのが4年時には約半数にまで減少し、抵抗感をあまり感じないという学生が増加している。このことは、1年時と4年時の間に有意差が認められたことから、介護実習等での排泄介護経験の有無や学内での学習経験量が影響しているものと考えられる。看護学生を対象とした市丸ら³⁾の研究結果によれば、排泄の援助の受け止め方に関して肯定的に受け止めている学生よりも、「技術的に難しい、大変」「嫌、やりたくない」「抵抗がある、できれば避けたい」などと否定的に受け止めている学生のほうが多いものの、否定的に受け止めている学生は、1年次授業前よりも授業後に減少し、2年次になるとさらに減少している。

このように、本研究では先行研究と同様の調査結果が示されたが、学内での学習経験に加え介護実習での経験が、学生の排泄介護への抵抗感の減少につながっていることが考えられた。ただし、より長期にわたり同じ入学年度の学生に対して調査を実施してきた点で意義のある研究ではあるが、1年時と4年時の調査の過程で対象者数が13名減少している。この13名は、退学等を含め1年時の調査以降に介護福祉士養成課程を途中で辞めており、排泄介護に抵抗感のある学生が辞めた可能性もあることを考慮してみる必要がある。

介護学生を対象とした今回の調査結果では、排泄介護に携わることへの抵抗感の有無についてそれぞれ理由を聞いているが、「他人の排泄に関わることへの抵抗感」を理由に挙げる学生が4年時より1年時に有意に多かった。また、抵抗感の有無の理由のうち、「排泄介護の経験の乏しさ」は1年時の特徴的な回答であり、「排

「排泄介護の経験による慣れ」は4年時の特徴的な回答であった。この2つの項目について1年時と4年時の間に有意差があったのは、介護実習経験の有無によるものであり必然性があると考えられる。「排泄介護に対する漠然とした否定的イメージ」を理由とした回答が1年時のみにあったことも、1年時では介護実習経験がなく、まして排泄介護について学内で学習する以前にこの調査を実施したためであると考えられる。1年時は排泄介護に携わったことのある学生が少ないため、「経験がないからわからず、想像できない」「経験がないためうまくできるか不安」という気持ちにつながっていることが推察される。

一方で、「生理機能的観点での必要性から」という理由で抵抗感のない学生は1年時より4年時に有意に多かった。4年時では、既に述べたとおり介護実習での経験と共に排泄介護に携わることへの抵抗感が少なくなり、順応できていると推察できる。同時に、これが単なる「慣れ」によるものだけではなく、専門的な学習や介護の経験によって培われたものであるとも考えられる。実際、排泄の講義後に排泄の意義が深められているとの研究報告¹⁾もある。介護福祉士の資格取得に向け、学生は4年間の学生生活の中で様々な専門的知識や技術を学習することになる。学内での排泄介護の講義・演習、学外介護実習における排泄介護の実習等を通じて、排泄という行為が生理的欲求の1つであり生きる上で欠かせない重要なものであることを、学生は理解できるようになっているものと推察できる。

なお、「排泄物の特性に対する抵抗感」があることを排泄介護の抵抗感の理由に挙げた学生は1年時・4年時共に多い傾向にあったが、これは1年時と4年時の間には有意差が認められなかった。したがって、全体的には排泄介護の経験とともに抵抗感を感じにくくなる傾向があるものの、その一方で、「汚い」「臭い」という排泄物特有の印象は、傾向として、排泄介護の経験の有無に関わらず排泄介護に抵抗感を感じさせてしまう1つの要因になっていると考えられる。排泄物に関連する抵抗感については、市

森ら⁴⁾の研究による男性介護者が抱く排泄ケアの抵抗感の特徴の1つとしても報告されている。今回は調査対象者の性別による比較検討は行っていないが、こうした視点からの検討も重要であろう。

排泄介護に携わることに対して、1年時では排泄介護の経験が乏しいために、排泄介護に対して漠然とした否定的なイメージしか持てない傾向にあることは既に述べたとおり推察できる。加えて、1年時で抵抗感を感じる学生が多いのは、「汚い」「臭い」という排泄物特有の印象や、「他人の排泄に関わる」という非日常的な場面・状況に向き合うことへの戸惑いからくるものと思われる。特に学習初期段階の学生には、障害・疾病等により自力での排泄ができず、やむを得ず他者の介護を受けなければならない被介護者の心情について、学習を通してより理解を深められるよう教授することが必要と考えられる。

5. 排泄介護に対するイメージと介護に対するイメージについて

排泄介護に対するイメージとしては、「嫌悪感・抵抗感のある介護領域」「羞恥心やプライバシー保護に対する不安的介護行為」「排泄介護に対する客観的情景」の回答が1年時に有意に多かったものの、4年時には減少している。「排泄物の特性の印象」と「排泄介護技術の難しさ・大変さ」の2つは4年時で最も多かった回答であるが、1年時と同程度の割合であり、1年時と4年時とでは有意差は認められなかった。こうしたことから、排泄介護に対しては、排泄介護の経験の有無に関わらず、「汚い」「臭い」という排泄物特有の印象が強く根付いていることと、「排泄介護は、介護の中でも技術的に難しいもの」という意識があるということがうかがえる。また、「嫌悪感・抵抗感のある介護領域」との回答が4年時に大幅に減少していることは、4年時に排泄介護に対する抵抗感を持つ割合が減少している結果からもうなずける。1年時では、排泄介護は「羞恥心を伴うもの」や「プライバシーが侵されやすい介護領域」などととらえられ、不安感を感じさせる介護行

為になっていることが推察される。さらに、「オムツ交換」や「排泄物の処理」のような「客観的情景」がそのまま排泄介護のイメージとして映っている。この結果から、1年時では排泄介護に対して機械的などらえ方がなされているのではないかと危惧される。すでに述べたことと同様に、1年時では排泄介護の経験が乏しく、排泄介護の実際の様子や重要性についての理解が乏しいがために、排泄介護に対する否定的なイメージを生むことにつながっていると考えられる。排泄の意義、羞恥心やプライバシー等に対する介護者への配慮・対応のあり方等について、学習を通して理解を深められるようにすることが求められる。

排泄介護に対しては、実習経験の有無に関わらず排泄物特有のイメージや技術的な難しさを感じやすい一方で、実習経験や学習経験によって排泄介護の生理機能的観点での必要性の認識から抵抗感や否定的イメージが少なくなることが、本研究で明らかになった主要な知見である。

なお、当初に抱いていた「介護」のイメージと現在の「介護」のイメージの違いについては、4年時に新たに追加した調査項目のため、平成25年度の4年生に加え、参考までに同じ年度の1年生にも調査を行った。平成25年度の1年生は、入学時と現在とでの介護のイメージに違いがほとんどなかったが、これは、調査が入学時から間もない時期に行われたためであると考えられる。これに対し平成25年度の4年生については、半数以上の学生が入学時と現在とでの介護のイメージに違いを感じている。具体的な回答内容から、1年生では、介護が「自立支援」を念頭に行われていることの気づきや、授業による介護の仕事の大変さの実感を得ていることが読み取れる。また、4年生では、当初「暗い」「辛い」「大変」などと感じていた介護のイメージが、介護実習を通して、大変な中にも「楽しさ」があり、「やりがいのあるもの」へと変化している様子が読み取れる。介護実習等による学びや気づきの回答もある。しかし、介護実習による「介護の仕事の大変さ」の実感のみに留まる回答や、実際の介護の現場にふれ、必ずしも教科書どおりには実践できていない現実へ

の戸惑いの回答も見受けられた。

必ずしも良いイメージへの変化の回答だけではなかったが、介護実習や授業を通して、大変な業務の中にも、介護の魅力を見出せることができていることや、多くの学び・気づきを得ることができていることが推察できた。「介護の仕事の大変さ」だけではなく、そこから介護の「楽しさ」や「やりがい」を見出せる学生を少しでも増やせるようにしていかなければならない。そのためにも、介護実習に送り出す側の教員の授業のあり方や指導のあり方を工夫する必要がある。さらには、介護実習受け入れ施設の介護サービスの質の確保も重要である。「介護人材不足」が深刻な問題になっている今日、介護福祉士の養成校側と介護実習施設が連携をし、今後の日本の介護を担う若い学生たちが介護に魅力を感じ、介護の仕事に誇りを持って生き生きと介護に携われるような体制づくりが求められる。

V. まとめ

本研究では、同じ入学年度の介護学生の1年時と4年時の排泄介護に関する経験と意識について比較検討を行ったが、排泄介護に携わった経験のある学生は1年時には少数であったものの、4年時までには介護実習等によりトイレへの誘導・介助やオムツ交換を中心とした様々な方法での排泄介護に携わっていた。

1年時は、他人の排泄介護に関わることへの抵抗感や漠然としたイメージ、経験の乏しさを理由に、排泄介護に対して否定的なイメージを抱き、排泄介護に携わることに抵抗感を持つ学生が多かったが、4年時は、介護実習等での経験による排泄介護への順応、生理機能的観点での必要性の認識から抵抗感を持つ学生が大幅に減少しており、1年時と4年時の間に有意な差がみられた。

排泄介護のイメージは、全体的には1年時・4年時共に「汚い」「臭い」といった「排泄物の特性の印象」や「排泄介護技術の難しさ・大変さ」としてとらえられていた。だが、1年時で多くみられた「排泄介護は介護の中でも嫌悪

感・抵抗感のある領域」「羞恥心やプライバシーの保護の点から不安」といった否定的なイメージは4年時までには減少していた。こうしたことから、実習経験の有無に関わらず排泄介護に対する「汚い」「臭い」といった排泄物特有のイメージ、技術面での難しさや大変さはあるものの、排泄介護の実習経験や講義等による学習経験と共に排泄介護の生理機能的観点での必要性の理解が深まり、排泄介護に対する抵抗感や否定的イメージが少なくなることが本研究で明らかになった。

VI. 研究の展望と今後の課題

市丸ら³⁾は「学習進度にともない援助の場面においては『排泄の意義』のイメージを受けて、学生の思いは対象に意識が傾くものと思われる」と述べている。今後の授業展開において、「排泄の意義」の重要性を強調して教授するなどし、学生が被介護者側の視点に立って支援していくことの必要性をより理解できるよう努めていかなければならない。今回排泄介護のイメージと介護のイメージの関係性までは追究することができなかったが、それぞれのイメージを良いものに変えられるよう、教育の工夫が求められる。

なお、今回は「排泄介護」と一括りにしたが、排便の介護に特化した排泄介護の研究報告⁷⁾もあり、排尿よりも排便の介護のほうが身体的・精神的負担が大きいとも考えられる。排便と排尿の介護の別、またその中でも具体的にどのよ

うな場面・状況下での経験をしたかということが排泄介護の印象を大きく左右する可能性がある。このことをふまえ、より詳細に調査していくことも必要であったと考えられたため、今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

- 1) 天野雅美 (2000) 「講義」の教育効果についての研究—排泄に関する講義を事例として—。東京医科大学看護専門学校紀要, 10 (1) : 3-10
- 2) 土井英子 (1999) 新見女子短期大学看護学科卒業生の床上排泄の援助における意識と実態—排泄の援助がケアとなるために—。新見公立短期大学紀要, 20 : 77-85
- 3) 市丸訓子, 永峯卓哉, 中村恵子 (2002) 看護学生の排泄の援助に関する研究—排泄に対する思いの分析から—。県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要, 3 : 103-110
- 4) 市森明恵ほか10名 (2004) 男性介護者が抱く排泄ケアへの抵抗感と排泄ケアの実施を受け入れる思い。日本地域看護学会誌, 6 (2) : 28-37
- 5) 内閣府編 (2013) 高齢社会白書。印刷通販株式会社 : 東京, p.6-7
- 6) 内閣府編 (2013) 高齢社会白書。印刷通販株式会社 : 東京, p.24, p.26
- 7) 辻村真由子 (2007) 要介護高齢者の排便ケアに対する家族介護者の順応の状況とその関連要因。千葉看護学会誌, 13 (1) : 9-16

(2014年 11月28日受付)
(2015年 1月27日受理)